



# 茨城は地図と測量 揺籃の地

ようらん (ゆりかご)

(その1)

## 「長赤水の出し村なり」(忠敬日記) 江戸の大ベストセラー・赤水図

全国を歩いた伊能忠敬の測量日記『伊能忠敬日記』には、さまざまな名所旧跡の名があげられています。8月号では一昨年新たに世界記憶遺産に指定された上野三碑(群馬県)の碑文を忠敬が写していたとご紹介しました。そんな忠敬日記の中で、常陸国・赤浜村(茨城県高萩市)を通った折に記されているのが、「長赤水の出し村なり」という一節です。忠敬にとって、「(赤浜村といえば)あの長赤水の出身地」と特記せずにはいられない情報だったのでしょう。

長赤水=長久保赤水是、江戸時代後期から幕末・明治にかけて日本でもっとも普及した地図の作者。伊能忠敬より28歳年長で、農民階級ながら儒学をきわめ、国内外の膨大な資料を読み込んだ地理学の知識をさまざまな地図としてまとめた人です。なかでも1779(安永8)年に完成させた『改正日本輿地路程全図』は、江戸時代後期の大ベストセラー地図で、赤水の死後も長く発行され続けました。別の本の付録に付けられたり、海賊版が出回ったり。シーボルトをはじめとする外国人の手にも渡りました。大量出版された実用地図という点が、秘蔵

された伊能図との大きな違い。そのため、18世紀末～幕末に向かう日本において、長久保赤水の名は、疑いなく世に轟いていました。

「しかし、現在は長久保赤水の名を知る人は少ないですね。以前は、地元でも郷土史家の方々くらいしか知らなくて。郷土の偉人なのにそれでは残念だと、1992(平成4)年に顕彰会を立ち上げて活動しています」とおっしゃるのは、顕彰会会長の佐川春久さん。今号では、佐川さんのご案内で赤水の故郷・高萩市を巡りながら、その足跡を追います。

## シーボルトが語る 情報メディアとしての赤水図

さて赤水の地図がなぜそれほど売れたのか、理由の一つは「正確さ」にあります。赤水以前の地図は、絵師・石川流宣が元禄年間に発行した『日本海山潮陸図』などに代表される「絵地図」でした。街道や宿場が描きこまれ



て便利である 赤水自画像

し、絵として美しいけれど、距離や位置関係はあまりあてにならないもの。対して赤水是「正確さ」を目指しました。『改正日本輿地路程全図』では、「一寸(約3cm)が道のり十里(約40km)にあたる」とし、緯度・経度を表す方眼線も入れて、「緯度1度は約32里(約125.8km)」と示しています。このような表現の地図は、赤水以前にはほとんどなかったのです。\*1

ただしこの地図が、現状、正しいといえないことも赤水是承知していて、凡例(次ページ写真参照)では、わかる限りの調整法を提示しています。

## ご案内いただいたのは 佐川春久氏

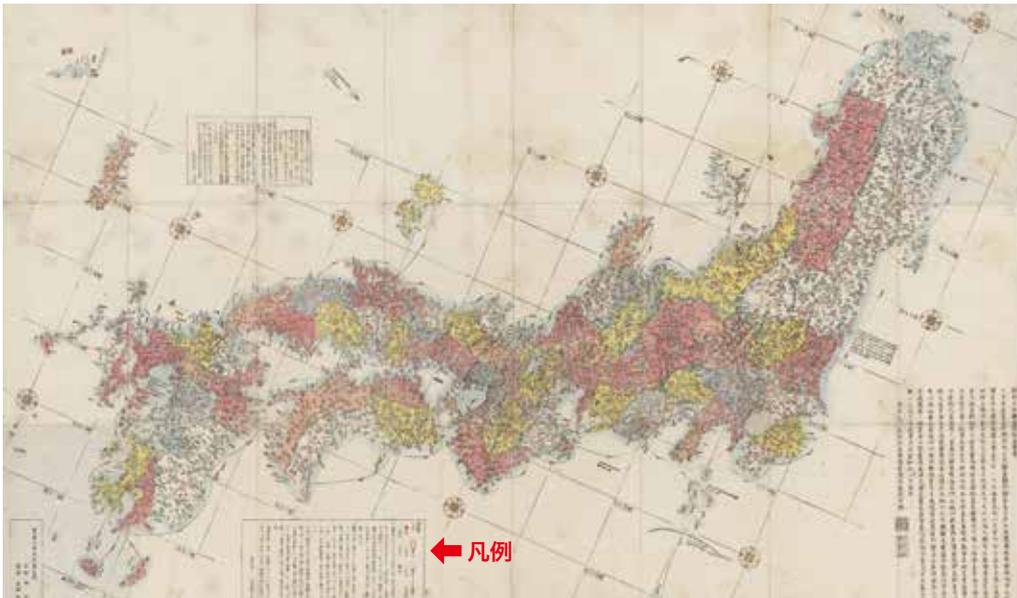
長久保赤水顕彰会 会長



顕彰会では赤水史料の現代語訳や伝記漫画など多数刊行している。

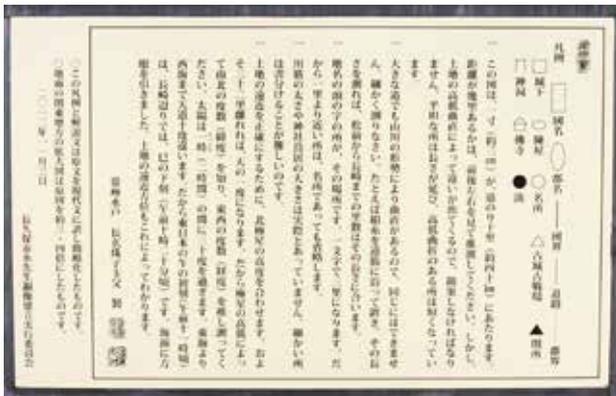
左から星莖由尚さん、長久保片雲(源蔵:赤水の同族・長久保赤水顕彰会顧問)さん、佐川春久さん





改正日本輿地路程全図第2版の袋(複製) 携行することを勸案し、折りたたんで袋入りで販売。お伊勢参りなどが流行した当時、旅人に絶大な人気を得た。

『改正日本輿地路程全図』第2版, 1791(寛政3)年 赤水図の初版は、1779(安永8)年に完成、翌年出版された。大きさは版によって違いがあり、縦85cm前後、横130~140cm。木版図に彩色され、多色の高価なものだと1枚25両した。序文は寛政の三博士の一人、柴野栗山。



地図凡例(原文)と現代語訳(高萩駅前・赤水図碑より)

赤水の地図についてシーボルトはこう評しています。  
 <同地図には経度・緯度が記されてはいるが、メルカトル法によるとされる投影法の精確さでも、場所その他の地点の位置の正しさでも信頼は置けない。その代わりにこの地図は、地誌学や統計にとっては多くの価値を持っている。そして日本の地理・歴史研究のために非常に有益な材料を提供している><地図上に記入されている地理学辞典とでもいうべきものである>※2

赤水の地図は、作図法に不足はあるものの、情報を共有するメディアとして最高峰のものであったと絶賛しています。それは、情報メディアとしての地図の意義をよく認識し、学問の一部として取り組んでいた赤水だからできた仕事だといえるでしょう。

実際、赤水が情報の更新を重要課題と考えていたことは、初版から第2版完成までの12年間に改訂を繰り返していたことからわかります。地形の修正、潮汐情報の追加、活火山と休火山の区別など、飽くことなく改めていきました。赤水は、実測する測量人ではなかつ



改製扶桑分里図 改正日本輿地路程全図の原図。1768(明和5)年に完成。森幸安『日本史輿地部日本分野図』、渋川春海『天文瓊統』、西川正休『天経惑問』などを参考にした。

たかかもしれませんが、偉大な地図人であったことは間違いありません。

### ▶ 長久保赤水何者ぞ?! 農民階級から学問で出世

長久保赤水(本名・守道のちに玄珠、俗名・源五兵衛)



赤水誕生地の碑

が生まれたのは、8代将軍・吉宗による享保の改革が始まったばかりの1717(享保2)年。生地の赤浜村は、



長久保赤水旧宅

水戸藩松岡領に属し、東側はすぐに太平洋が見渡せ、仙台まで続く奥州道が村内を貫いています。

長久保家は代々庄屋の家でしたが、父親は次男であったために赤水8歳の時に分家。その後、弟・母・父と相次いで亡くし、11歳から継母に育てられました。同族で頭彰会顧問の長久保片雲（源蔵）さんにお話をうかがうことができました。

「私が昔から聞いているのは、盆にもった砂などを使って小さい時から母親に文字を教えてもらっていたということです。何よりも学問が好きで、田んぼで馬の鼻取りをしながら本を読んだとか。それで継母の勧めで14歳から塾に通うようになったそうです」

1里離れた医師・鈴木玄淳の私塾が、後の赤水を作る土台に。ここで得た知友とともに江戸遊学を経験し、水戸藩が『大日本史』を編纂するために開いた彰考館にも出入りするようになります。百姓の仕事を果たしながらも、名越南溪（昌平黌の塾頭からのちに彰考館総裁）に師事して学才を磨いた赤水。第一義的に学んでいたのは儒学ですが、彰考館などを通じて天文・暦学に触れたことは確かです。藩の内外で儒学の講義に招かれるようになった35歳頃から地図資料を集め、写し始めるようになりました。

## 61歳で水戸藩の侍講に 儒学・天文・地理学・農政学者

赤水が、なぜ地図製作に興味を持ち始めたのかは、実は謎です。純粋な知的好奇心や、ある種の学問的野心があったらうことは推測されますが、きっかけになるような出来事が書き残されているわけではありません。個々の地図の編集過程なども、海外で発見された赤水地図、遺された資料（2017年に赤水関連資料＝地図資料・書籍・書簡など693点が県の有形文化財に指定）などをもとに、まさに本格的研究が始まったばかりといえます。

大まかにいって赤水の地図づくりは、既成の民間地図や諸藩の国絵図などを収集して基盤とし、天文学については渋川春海の緯度数値などを使ったと考えられています。その他、◆旅人を招いて見聞を集める ◆多くの知識人と交流する、など赤水は人的ネットワークを築いて生の情報をつかんでいたようです。その意味で赤水が求心力のある人物であったことも想像されます。地図に関わる赤水の後半生を以下にまとめます。

**1760 (宝暦10) 年44歳** 東北を旅する。

**1767 (明和4) 年51歳** 安南国（ベトナム）漂流民の引き取りに隣村の庄屋代理として長崎に向かう。

**1768 (明和5) 年52歳** 『改製扶桑分里図』完成。水戸藩の郷土格となる。



改正日本輿地路程全図・初版以降の下北半島 修正前 初版の年からすでに部分的な修正がスタート。

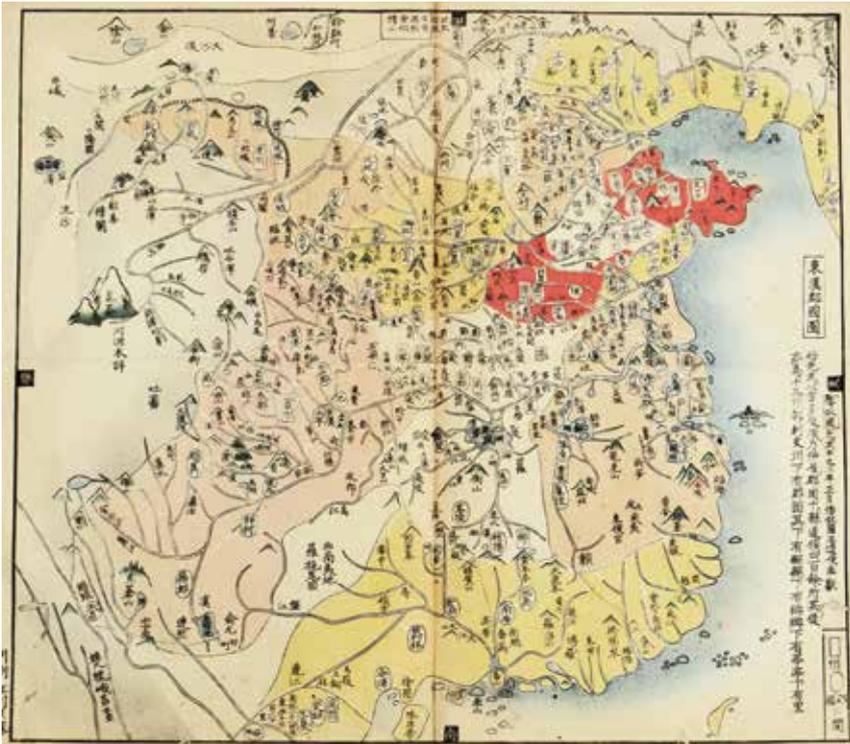


赤水手書きの修正の跡 今年、赤水の修正過程を示す貴重な資料がご子孫宅から見つかった。

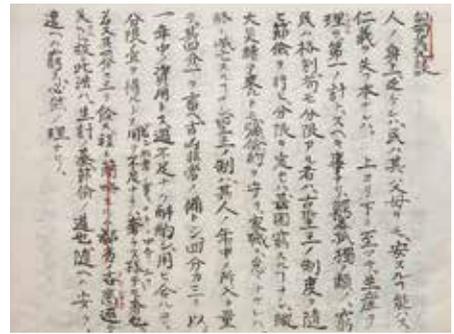


修正後 下北半島の形が訂正され、地名も増えている。地名表記数は初版の約4200から2版では約6000に。

- 1773 (安永2) 年57歳** 『芻蕘談』<sup>すうじょうだん</sup>を著し藩政に意見。
- 1774 (安永3) 年58歳** 京都・大阪を旅し、名のある学者・学僧・書肆を訪ねる。翌1775年、序文が完成。
- 1777 (安永6) 年61歳** 6代水戸藩主治保（27歳）の侍講に。江戸・小石川の水戸藩邸内の儒者長屋に住む。
- 1779 (安永8) 年63歳** 『改正日本輿地路程全図』が完成。翌1780年、大坂で出版される。



唐土歴代州都沿革地図 夏王朝から明末までの歴代州都を書き込み年代順に12枚にまとめたもの。各藩校で学習用に使われた。



芻蕘談 俟約や間引き・博徒取締りに言及。この他、年貢米徴収の方法に意見した書『農民疾苦』もある。



大日本史地理志草稿 赤水は博覧強記ともいわれるほど地理学をきわめ、水戸学の一角を担った。

- 1783 (天明3) 年67歳 『大清広輿図』完成。
  - 1785 (天明5) 年69歳 『改正地球万国全図』完成。
  - 翌1786年より『大日本史地理志』編集に従事
  - 1789 (寛政元) 年73歳 『唐土歴代州都沿革地図』完成。
  - 1797 (寛政9) 年81歳 江戸から赤浜へ帰郷する。
- 伊能忠敬と同じく、赤水は後半生を輝かせた人だといえます。

### 長久保赤水と水戸藩の改革

「赤水は51歳で長崎に行っています。たぶん日本地図製作中の赤水は、好機到来と願い出て、適任者として命ぜられたのだと思います。長崎では清国人と筆談をして、漢詩のやりとりもできたとか。そんなこともあり、歴年の学問の功績が認められ、郷土になっています」と佐川さん。

その後、赤水は郡奉行からの依頼で『芻蕘談』を書き上げて改善策を提言。地図製作も着々と進行。博識多才の人として名声が高まり、水戸藩の侍講に上りました。

水戸藩侍講の立場から、貴重な情報(田沼意次が派遣した蝦夷地探検隊員から聞き取り調査するなど)も得られるようになり、赤水の『蝦夷之図』の成果にも結びつきました。また、藩主・治保が進める『大日本史』の校訂・増補作業において赤水は地理志の執筆も命じられました。

「水戸というと光圈や斉昭ばかりが語られますが、6代藩主・治保は中興の祖。治保が実行した財政改革が水戸を支え、幕末につながります。その治保の先生が赤水だった

のです。間引き防止など治保が行った農村政策も赤水の提言による可能性が大きいです」

治保と赤水主従の絆はかたく、1791(寛政3)年、『改正日本輿地路程全図』の2版が完成した年には、治保は赤浜の赤水の家に立ち寄り、家族15人が拝謁。赤水生涯の栄光を味わいました。

赤水が亡くなったのは1801(享和元)年7月23日。享年85。伊能忠敬の第2次測量隊が赤浜村を通る10日ほど前のことでした。



9代藩主・斉昭から赤水子孫に下賜された詩文付き扇の碑 赤水旧宅には、水戸藩主が3人(6代、8代、9代)も訪れた。



長久保赤水の墓 赤浜村、潮騒の聞こえる松林内。碑文は治保の弟で水戸藩主・松平頼教によるもの。幕末、脱藩した吉田松陰が東北を旅した時に墓参している。

※1手描きでは1754(宝暦4)年に森幸安によって『日本史輿地部日本分野図』が出されている。

※2『日本』中井晶夫訳/雄松堂書店(高萩市民文化誌『ゆずりは』・「赤水図は海を越えて」馬場章より)



取材・文 中田ひとみ(編集・ライター)

月刊『測量』では、「博物館めぐり」「ドキュメント 技術をつくったエンジニア」「映画 剣岳 点の記 出演者インタビュー」などを担当した。